

一九七七年十二月三日第三種郵便物認可
(毎月十八回)一・二・三・五・六・七の日発行
二〇二三年十月二十一日発行SSKP通巻第八二四六号



令和5年度 千葉県自閉症協会 総会模様



令和5年5月20日(土)、千葉市美術館講堂(千葉市中央区中央3-10-8)において、各地区自閉症協会の代表者が出席して、令和5年度千葉県自閉症協会通常総会(通算52回)親の会、支部を

千葉県自閉症協会
会長 大屋 滋
事務局 千葉市若葉区西都賀二一-十六
共栄ビル3F
URL: <http://www.inetqor.jp/japan/aschiba/>

て)が開催されました。松戸市自閉症協会の四家秀治理事による開会宣言、大屋滋会長の挨拶の後、来賓紹介があり、来賓者を代表して、千葉県健康福祉部障害者福祉推進課課長中里幸治様と千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課課長杉村哲様より祝辞を賜りました。

流山市自閉症協会の澤田晃司理事が議長に選出され、令和4年度の千葉県自閉症協会活動について、大屋会長より全般的活動報告、事務局長の富江理事より各局局活動報告、啓発事業報告がされ、今関理事より収支報告、特別会計収支報告、貸借対照表についての報告がされ、角口監事より監査報告がされました。

続いて、竹蓋伸六副会長から、事務所移転に伴う定款の変更が提案され、承認されました。大屋会長から、角口早苗監事の退任に伴い、菊池裕美監事が選任された旨

目次

令和5年度千葉県自閉症協会総会模様	P1
講演抄録	P1
親子の旅	P8
世界自閉症啓発デーinちば	P11

の発表がありました。引き続き、大屋会長より令和5年度の基本方針、事務局長の富江理事より各局活動計画の報告がされ、今関理事より令和5年度予算についての報告がされました。

来賓として、千葉県健康福祉部障害者福祉推進課課長中里幸治様、千葉県教育庁教育振興部特別支援教育課課長杉村哲様、千葉県の障害者福祉協会副会長小林勉様、千葉県TEACCHプログラム研究会代表堀子榮様、千葉県発達障害者支援センターセンター長館山聡様、千葉市発達障害者支援センター所長仲村美緒様、(一社)千葉県手をつなぐ育成会常務理事・事務局局長岩根信也様がご出席くださいました。

総会に引き続き、東京藝術大学特任教授伊藤達矢先生を講師に招いた千葉県自閉症協会講演会が開催されました。

講演抄録

「東京藝大で福祉?」 「アート×福祉」

「アートという光をあてると、見えないものが見えてくる」

講師 東京藝術大学特任教授 伊藤達矢氏

日時 令和5年5月20日(土)

14時30分~16時30分
会場 千葉市美術館講堂

・冒頭の挨拶

東京藝術大学という、絵を描いたり、楽器を弾いたりといったプロのアーティストを育てるところというのを思い描かれる方も多いかと思います。それもあります。最近の藝大はそれだけではなく、私には、美術教育がベアりません。私は、美術教育がベアス。芸術が社会とどうつながっていくか、芸術家の持っている力がどう社会を変えていくことにつながっていくのか?そこにエネルギー

成壮年自閉症課題研究会(成壮研)の活動報告	P16
長男のグルーホーム入居について	P16
「地域で暮らす」ということ	P16
活動日誌	P16
お知らせ	P13
編集後記	P13

ギーを充填していけるのか？というのを探っています。

（伊藤達矢氏は、この後、講演の前に「チェックイン」と称する最初のウォーミングアップタイム、デイスカッションタイムを3分ほど設けた。これは受講者がそれぞれ近くに座っている3人で「今どんな感じでここにいるか」をざっくりばらんに話し合う、語り合う時間である。

講演中、合計4回、このような、受講者同士で話し合わせる時間を設けた。ちなみに、2回目は「美術館のイメージについて」。3回目は、発達障害者に向けて、美術館で書道を見せ、体験させるプロジェクトを企画、発案した2人のビュー映像を流した後で、改めて「美術館の印象、二人のインタビューの感想など」。4回目は、締めめの時間としての「チェックアウト」であった。）

・講演の主たるテーマ

共生社会をつくる アートと福祉
本日は「アート×福祉」…アートと福祉、というテーマでお話します。まず、本題に入る前に、障

害についてですが、『障害』とはなんだろう？というところから考えていこうと思います。『障害』をどうとらえるかについて見ていきましょう。

本日お集りの皆さまは、次に挙げる例についてはすでにご存じかもしれませんが、例えば、車いすで行動する方が行こうとするところ、目指すべきところに進んでいったらその途中に段差があつて行けなくなつてしまつたとします。この方は、足が不自由で車いすに乗っています。ですから、足に障害があるから、目的地に行けないという見方をされるのかもしれませんが、でも、それは医療的な見方であつて、社会的に見れば、これは段差になつているからその方が行こうとするところに行けないのです。段差ではなくスロープになつていれば行けるのですから社会的な見方をすれば段差が障害なのであつて、スロープではなく、段差になつているから、目的地に行けないのです。障害は「足」ではなく「段差」なのです。

前者的な見方を医療モデル、後者的な見方を社会モデルと表現します。皆さんもこれは聞いたこと

があると思います。

では、社会モデルをどうやって作り上げていくか？あるいは、こういう認識、理解を持つてもらうにはどうすればいいのか？

そのために我々は、芸術というもののが非常に有効に役立つのではないかと考えています。これはもつとと言うと、医療、福祉のため、障害のある方のためではなく、いろいろな方が幸せに生きていくためにという視点に立っています。そもそも、芸術は、豊かに生きていくためにあるのですから、そこで我々藝大では「Diversity on the Arts Project」通称DORプロジェクト「多様な人々が共成するプロジェクト」を行つています。毎年12月頃、新規のメンバーを募つています。100人程度です。ここでは、講師として現代の社会に生きづらさを感じている当事者、社会との関わりを持ち表現を行うアーティスト、現代の福祉をより広い視点で考え直す多様な分野の専門家を迎えます。

もちろん、藝大生だけがターゲットではありませんので、興味のある方はぜひ参加していただ

たらと思います。（会場ではVTRにまとめてあるものを紹介した）

さて、本日お集まりいただいている場所は、千葉市美術館です。皆さんは美術館ってどんな場所、どんなイメージですか？全く興味が無い方はいないとは思いますが、どうでしょうか？

（ここで、2回目の参加者同士のデイスカッションタイムに入つた）



○障害者と健常者が共にアートを楽しむ

伊藤氏はPCで、東京都美術館で行ったとびらプロジェクトのワ

ンシーンの写真を使って説明を始める。それは一枚の絵を見ている子供とその周りに集まって何かをしているシーン。

これは先天性の耳が聞こえない子が絵を見て、それについていろいろな感想を手話で伝え合っているシーンです。手話には、先天性の耳が聞こえない人が使う日本手話と、後天的に耳が聞こえなくなつてしまった人が使う日本手話の二つがあります。

先天的に耳が聞こえない人の手話は「音とは別に獲得した言語」。これが日本手話。後天的に耳が聞こえなくなった人の中には元々日本語がありますから、言葉の置き換えを手話で行います。これが日本手話です。

写真を紹介しながら、絵を見ている子は先天的に耳が聞こえないので、日本手話で気持ちを伝えようとしています。それを日本手話、日本語手話、両方の手話がわかっていてる人（これも耳の聞こえない人です）が日本語手話に変換し、後天的に耳が聞こえなくなった子に伝え、さらにその気持ちを周りにいる健常者の子も理解してコミュニケーションを図っている写

真です。そこにとびらプロジェクトの人であるアートコミュニケーションターも入ってきて、いろいろな絵、作品を一緒に見ながら対話しあっているという試みです。

ここで大事なものは、見た側がきちんと気持ちを表現できているかどうかということよりも、それをきちんと聞いてくれる人がどれだけいるかということです。誰がどういう感想を持ってもしつかりと聞いてくれる人がいること、これが美術館の中の社会モデルの構築につながってくるであろうと思います。もちろんバリアフリーとかも大事です。

次に紹介されたのは盲導犬と目の見えない方が美術館に来ている写真。この方は途中失明。

目の見えない方は結構美術館にいらつしやいます。この方たちはどうやって作品を見ているか？といえは対話をしながら作品を見ています。

ここにもアートコミュニケーションターがあります。「どんな作品がありますか？」という質問に対し、アートコミュニケーションターが「手を広げてみてください。そう、それぐらいの大きさの絵です」などと話しな

がら、山が描かれていれば、その稜線の様子とか、色、などを会話しながら説明し、この目の見えない方は絵を理解、イメージして鑑賞するんです。

ところで、話は変わりますが、修学旅行生もたくさん、美術館に来ます。しかし、ベンチで寝ているケースもあります。そこで、思うんです。「見る」とは何か？

健常者である修学旅行生たちは光をとらえることはできる。でも、飽きて、というか関心があまりないからなのか寝てしまう。

一方で、目の見えない人は、光はとらえられないけれど、対話によつて心の網膜に必死に絵を映し出そうとすることができ、そうしている、と。

今は、例えば、目の見えない人が作品を知るだけなら、わざわざ美術館に行かなくてもインターネットでアクセスして絵を出して、さらに文字情報を自動読み上げて伝えてもらつてもわかるのかもしれないですし、目が見えても、耳が聞こえない人なら文字情報で済むかもしれないですが、それは、社会モデルとしては違うのではないのでしょうか。美術館を社会モデル

ル化させようと思つたら、バリアフリーより、いろんな人たちが対話できる状況を増やす。それは言い換えれば誰かに少しづつ頼る、依存先を増やしていくことなのではないのでしょうか。アートコミュニケーションターと呼ばれる人たちは、そういった依存のための役割を担う活動をしている存在でもあるんです。

彼らは、全国にたくさんいて、その拠点は7か所あります。

こういったコンセプトで、いろいろ活動してきたわけですが、もう一つ詳しくお伝えしたい事例があります。と言って、伊藤氏はPCから新たな写真を見せる。書道の作品を見る発達障害者。その保護者。アートコミュニケーションターなど紹介される。

○発達障害者がアートを心底楽しめる空間づくり

① 設定

特別支援学校に勤めていらつしやつた後、今は教育相談という立場で活動しているAさんと、発達障害者の療育センターで働いていらつしやるBさんがアートコミュニケーションターになられて企画し

たプログラムです。ほかの一般のアートコミュニケーターと一緒にやって発達障害者に向けて美術館で行いました。発達障害者の社会的な位置づけ、美術館の中で何かできないだろうか？という取り組みです。ほんとうは海外からの美術品を見て、やろうと考えたのですが、コロナ禍で、その美術品が届かなくなり、東京都美術館に所蔵されていた書道を見てやろうよということになりました。

「果たして書道の作品を発達障害の子供たちが関心を持ち、おもしろがってくれるだろうか？」というところから始まりました。

20人ぐらいのアートコミュニケーターが準備をしてこの日を迎えました。参加する子供たちは、療育センターの方が集めてくださいました。

書の展示室に集まった子供たちは約10人、保護者約10人、アートコミュニケーター約20人。計40人くらいでした。コロナ期間中に狭いスペースに40人という結構な数です。なので、アートコミュニケーターの半分は裏方でワークショップを支えてくれました。

まず、子供一人とアートコミュニケーター一人でペアという形をとりました。プログラムは事前につくるけれど、その通りにならないくても、例えば、書道に飽きちゃって隣の上野動物園まで行っちゃったとしてもその子がアートコミュニケーターとペアで1日行動すれば、それもありにすることにしました。つまり、決めたペアで行動さえすればこれは事前に考えていたプログラム内だということにして始めたのです。

まず、大前提として、この試みは「教えてあげる」を基本にはしません。子供が話したこと、発信していることを聞いてあげる、尊重してあげることが基本です。

② 練り上げた手順と想定外のうれしい結果

アートコミュニケーターが自己紹介をし、きょうのプログラムの内容を知らせて、いよいよ開始。展示室で書道の作品を見ていきます。この日のアートコミュニケーターは、日頃、自分の周りに発達障害者がいないという人ばかりで、この日のために準備している段階からアートコミュニケーター自身もいろいろ学んで臨むことになりました。そして一つ一つ理解

して当日を迎えました。その結果、発達障害者といっても別に遠い世界の人ではないと気づく人も多くいました。

ひと通り、当日の流れを説明したところで、その展示室とは違う場所に障子紙と墨を用意し、発達障害の子供たちに墨の素材を体験してもらいました。

墨のじみ具合、書き味、におい、そのすべてがたぶん彼らには新鮮です。

で、何を書く？となって：大きなマルを書く！ということになりました。最初はぎこちないですが、だんだん大胆になってきたりします。気持ちがあぐれてくると、濃い墨で書いたり、薄い墨で書いたり、違うものを書いたり。墨つておもしろいなとか、こんな表情を出すんだなどと体験していきます。いうまでもなく、常にアートコミュニケーターとワンペアです。

展示室で難しい書を「これ、何と読む？」なんて言う話になると一気に面倒くさくなったりしますが、こうして身体を動かしながら書を体験し、アートコミュニケーターも交じって、この部分はかつ

こいじゃんなどと話しあったりしていると感じるものがあります。

それから、再び、書の展示室に行ったら、皆、結構、作品（書）を見るんです。そして、その作品について、これ、きれいだねとか、言ったりしているんです。こんな空気が展示室で展開されるとは当初、想定していませんでした。書道は、決してカラフルなものではなく、白と黒だけですから。

このやり方、プログラムは、別に専門家が考えたのではなく、アートコミュニケーターがみんな考えてやったことです。アートコミュニケーターと子供がワンペアで行動すると決めていたことも大きかったと思います。それによって発達障害の子は、自分が感じることを聞いてくれる人、自分に目を向けてくれる人が常に隣りにいることになりました。こういったペアの状況を作ること、子供たちは誰も展示室を出ていかずに1時間くらい過ごしました。

そのあとで、今度は美術館をアートコミュニケーターと散歩しました。スムーズにいきましたし、いろいろな場所で記念写真を撮ったりもしました。そうして再度、

先ほど、みんなでワイワイ書を体験した場所に戻ってきました。実は、その間に、裏方の担当になっていたアートコミュニケーターが、彼らの作品をいろいろなところに吊るしたりしておいたんです。すると、子どもたちから「おー、こんな所に吊るしてある！」といった反応がありました。そこで、今度は、「いいと思う場所を切り取って台紙に貼ってみよう」と提案しました。こうして、そこからまた様々な意見交換が始まり、ついには、ちょっとした額装が出来上がりました。

当日、アートコミュニケーターの一人が、来る子供たちの名前を掘った消しゴム版を作っていました。これは、ちょっとしたサプライズだったのですが、結局、それぞれの子の作品の落款になり、皆の作品が完成するという1日になったのです。消しゴム版、グッドアイデアでした。

また、待っている保護者が楽しそうにしていたのもとてもよかったです。

我々は、保護者が楽しむ、親同士がコミュニケーションを取り合える空間も重要であると考えてい

ました。以前、そのための保護者カフェをやってみたこともありま。その時は全6回のプログラムだったということもあったのですが、好評でした。そして、それによって大きな成果もあったと考えています。

それは、また、後にもお話ししますが、ウィークタイズ、弱い関係性を大事にすることの大切さを改めて確認できたことでした。

（ここで、伊藤氏は今回のプログラムを企画した2人のアートコーディネーターの感想VTRを流した。）

Aさん

「私は、長く特別支援学校に勤めていて発達障害に関わってきました。その後、教育相談になって学校にいろいろ巡回に行く立場になりました。そこで、グレーゾーンのお子さんの孤立化している様子が見えました。小5だったと思うのですが、ある日の休み時間、誰としゃべりませんでした。教室移動のときも一人でササッと行動するんです。私が気になってちょっと覗くと手でノート隠しました。そのとき『こいつは何しに

来たんだ』というような悲しい目で私を見ました。私には、この経験が原点にありまして、それが胸に突き刺さるような感じで、ずーっと残っていたんです。彼らは福祉的な支援がほとんどなく、通常という社会の中で、自分でなんとかしなければなりません。そういう過酷な現実を皆さんに知ってほしい。根底にはそういうことを理解できる大人が増えてほしいという思いがあります。学校や、親以外の大人が、アートという幅広い舞台の中で、関わることで、少し子供が、自己表現したりとか、自分のことについて話ができるのかという、自分の気持ちを広げられるような機会が得られるのではないかと、『学校だけじゃないんだよ』というような体験を落とし込んでほしいなと思って、このような企画をしました。そして、今回の試みでアートはそんなとびらを聞く可能性に満ちた場所かなと思いました」

Bさん

「私は、元々小児科医で、病院で働いていたんですけれども、病院に来てくれる人を診るだけでは、しつくりこない、違うんじゃないかな?と

思っていました。で、今は療育センターにいますが、こは病気を治す場ということではなく、暮らしている地域とか生活の場に出ていって少しでも過ごしやすくするための場です。さらに、そこで医療ができることはないか?ということをやっています。うちの施設は0歳から18歳まで、発達の気になるお子さんが利用できます。発達障害を持つ子は、思春期になると、人とつながりたいんだけれども、(元々人とつながることが苦手ですから)うまくいかないなあとというケースが多いです。また、先のことを予測することも苦手ですから、とても不安な毎日を通しています。今回、Aさんから声をかけていただいたので、外来で私が定期的にお会いしている『少し社会の中で居心地が悪くて、他の所に行ってみようと思うようなお子さんたち、親御さんたち』に、お声がけし、参加させてもらいました。アートを介した場は、非日常で、普段の物差しと違う場です。こうでなければいけないというところから解放する力が、アートとか、上野とか東京都美術館にはあるのかな?と思

ました。子供、親に楽しんでもらうための試みだったんだろうと思うのですが、いろんなところに行を変えてということになるかもしれないですが、影響を及ぼすようなものを引き出していただいたような気がします。ありがとうございます

（ここで、3回目のディスカッションタイムが設けられた。）



○重要なのはアートコミュニケーションターの情熱

アートコミュニケーションターの人たちは決してアートのプロフェッショナルではありません。でも、一緒に場を作っていくことが非常に重

要なんじゃないかと思えます。そして、アートを介したプログラム、それを上手につくることがサポートのメインではないのです。今まで見ていた景色が違ったものに見えとか、常識と違っていたものが常識ではなかったと気づくこととか、今までコミュニケーションを取りたいけど取れなかったというような空気を取っ払ってぶち抜いていくようなものがアートのエネルギーの一つです。

今の時代、自分とは何かを常に考えていくことも大事です。もちろん、楽しいプログラムもアートですが、それは表面的な部分なのかもしれません。

ここで、確認してほしいのですが、今まで紹介したプログラムの中に先生は登場していないんです。私も横で見ているだけです。

その人達が出してきたものを実現するために調整することはします。美術館サイドの協力体制の構築とか、美術品を展示してもらうにあたっての交渉とか。そういう事務的な作業ですね。

でも、中身については任せていただきます。参加する人達のクリエイティブティ。そういったものが、

社会モデル化させるためのエネルギーだと思っています。では、社会モデル化させることは、なぜ大事なんだろうといったそもそも論もあるだろうと思います。

ここで、今の社会の中で、人のつながりってなんだろうというような公共性についても考えてみたいと思います。

○公共性の役割ー今までとこれから

唐突ですが、世界的に見ると日本の政府は大きな政府というものにあたるものでしょうか？それとも小さな政府というものにあたるものでしょうか？

大きな政府を「ゆりかごから墓場まで」と言われるような、面倒見のいい政府。小さな政府を「自己責任化させられる政府」というふうに定義します。当然ですが、大きな政府は税金が高く、小さな政府は税金が安いです。

そういう見方かというと、日本の政府は大きいのか、小さいか？

結論から言うと日本は結構小さな政府なんですね。税金の入ってくる額、出ていく額についてはいろいろな見方ができると思います

が、例えば国民10000人当たりの公務員の数です。ヨーロッパで一番コンパクトな政府といわれるドイツはだいたい60人。福祉が進んでいるといわれる北欧だと100人ぐらいです。日本は34、5人程度。アメリカ、韓国なども日本と同程度です。これはあくまで国の方向性であって、日本がいかとか、悪いとかということではありませんが、とにかく、公務員の数は少ないのが日本ですから、比較すれば、税金は少ない部類になります。大きな政府か、小さな政府かの定義にあてはめると小さな政府で、日本は、「人が自己責任で生きていく政府」なんです。

さて、次に、こういう体制で、なぜ、今まで日本は大丈夫だったのか？です。ここで、これまでの日本を振り返ってみましょう。

改めて「公共」ですが、皆さん、「公共」とは？なんでしょう。字で説明すると、公（おおよけ）と共に、ということですが。

市民的公共性、中間的共同体というのがあります。

これは全く行政に頼るわけでも、全く個人で何とかしようというわけでもない存在です。集落の

共同作業とか町内会とかが該当するでしょう。今までの日本では個人的なリスクは、この中間的共同体が補ってくれていたんです。でもこの存在が、今は昔より小さくなっていきます。

なぜでしょうか？これは簡単に言うと、国が豊かになり、資本がどんどん入ってきたからです。

私は1975年生まれ。福島県会津の出身ですが、7歳の時、祖父が死にました。そのときは床の間に祭壇を組んでそこで葬式をやりました。村じゅうの人たちがその準備に手を貸してくれました。それがあたりまえのようになっていったんです。

でも私が大人になってから祖母が死んだときは、葬式は葬儀場で葬儀屋さんが全部やりました。

集落の人たちは軽く手伝いはしてくれましたが、祖父の時とは全く違っていました。つまり、資本が入ってきて葬式では中間的共同体が必要なくなってきたわけですね。

では、中間的共同体が以前より必要なくなってきた中で、さまざまな問題を個人のリスクにしないためにはどうすればいいでしょう？

今までの中間的共同体は、地縁血縁、だったかもしれません。それも大事ですが、私はここまでに、アートコミュニティというものを語ってきたように、文化で新たな縁を作れるのではないかと考えています。それは、文化縁です。地縁、血縁は、強い絆、みたいなものです。でも、今の時代、それだけで地域の中で幸せに暮らしていけるか？といえばそれは逆になりつつあるのではないのでしょうか？

そういうつながりとは別のゆるやかなつながりである文化縁がたくさんあればいいと思います。困ったときに相談しやすい人は必ずしも固い絆で結ばれた人とは限らず、文化縁でつながった誰かかもしれません。

今は、異なった価値観、多様性を認めるのが良しとされている時代です。重要なことです。でも一方で、それが尊重される反面、他者への関心が薄れていたりもします。そうすると、孤独という社会的課題が浮かび上がってくるケースも出てきます。発達障害があつて生きづらさを感じたりしている人は、個人ががんばれば良い

というわけではないのですから。また、近年のコロナ禍によって、より孤立、孤独が強くなっていたりもしています。障害者、健常者に関係なく、孤独は精神的にとってもよくなって、たばこを1日に15本吸うより健康に被害を与えるという研究結果も出ています。絆でなくてもいいから文化的なつながりはできないか？美術館、劇場などで、社会の中に新しい共有地をつくっていけないか？そんなふうに思っています。

先ほどの発達障害の子供たちを美術館で迎え入れ、書の展示で何かできないかと試みたプログラムですが、そこに関わった20名以上のアートコミュニケーターは、職業も年齢も立場も価値観も全く違う人たちですが、自分たちで何か新しい場、価値を考えて作っていました。

彼らにはそれをその場限りにならないで、社会的な価値に、また、その後、自分のエリアに帰ってからも、職場や家庭などでは多様な価値観があると思うのですが、それらを結びつけるコミュニケーターになってくれたらいいなと思っています。そういった人たち

が増えていけば、誰もが潜在力を発揮でき、つながりのある世界を作れるんじゃないかと思います。一人ひとりの実践も、学びも、小さくてもいいし、1回限りでも構わないと思います。でも、そういった新しい試みが柔軟な新しいコミュニティー(中間的共同体)を作っていくことにつながるのではないかと思っています。

こういったプログラムの内容について私は「美術館と大学と市民でつくるソーシャルデザインプロジェクト」という本にまとめたのですが、働き方研究者である西村佳哲さんがそこにコラムを寄せてくださっているので最後に紹介します。

「この国の経済成長の鈍化はバブル以前に始まっていたし、社会基盤にあたる自然環境の変動値も次第に高くなって、『これまで通りの暮らしをこれまで通り続けてゆける時代ではなくなりつつある』ことは、多く人が無意識に了解していると思う。ではどうすればいいの？という問いにおいて、答え以上に大事なものは、いま必要な仕事や活動を、互いに考え合いつくり出してゆける姿勢や関係性

の有無だと思う。必要なものごとに自分たちで気づき、この社会の隅々につくりだしてゆく力。与えられた枠組みの中で上手に生きる力ではなく、枠組み自体を作り直してゆくことも出来る力。この自治性は『みんな同じだからうまくゆく』というような同調圧力の高い自治の形とは異なる。かかわり合い互いに変化しながら、必要なかをつくりだしてゆく。その基本的な力の獲得を美術館で試みているのが『とびらプロジェクト』だ」

我々が生きていく上では、つい、今、目の前にある物の中で考えて行動してしまいます。でも、アートの重要どころというか、アートというのは、今、目の前にないけれど、必要な何かを小さくてもいいから作り出していこうとするエネルギー自体だと私は思っています。

（この後に4回目のディスカッションタイム「チェックアウト」を設け、講演は終わった。）



親子の旅

二〇二三・久里浜花の国遠足

君津地区自閉症協会

森野 貴子

今年はコロナも落ちついて来たので、久しぶりににじの会の皆でお出かけしようという話が出ました。日程や段取りを話し合い、フェリーに乗って久里浜花の国まで、大家族とボランティアさん一名での親子の旅になりました。

前日までは、台風が接近していると予報が出ていたので遠足が中止になってしまふのではと心配でしたが、当日は天気がとてもよくフェリー日和となりました。最高の遠足のスタートとなりました。子供達が成人しているのでフェリーに初めて乗る子達もいたのですが、騒ぐこともなかったのですが、親として子供の成長を感じました。親達も久しぶりに子供の成長を話したり、日頃の悩みを話したりと、充実したフェリーでの時間を過ごすことができました。

久里浜につきフェリーを下りてから花の国まで歩くのですが、道中の坂道が長くて親の中には疲れてしまう人もたくさんいました

が、男子チームは体力もあり、歩くのも速くどんどん先に行って、置いてかれてしまいました。



頂上に着いて皆でお弁当を食べました。厳しい坂道を登ってきた後で、にじの会の皆で食べるお弁当はとても美味しかったです。



お弁当を食べた後の自由時間では、いろいろなアスレチックで遊ぶ子や、親の中に混ざってお喋りをしていても楽しそうでした。その姿を見て、今日の遠足を企画することができてよかったなどと改めて感じました。



帰りは、フェリー乗り場近くのお土産屋さんで、お土産を買ってからフェリーに乗り込みました。フェリーで食べたソフトクリームがとても美味しかったです。

今回の花の国への遠足を通じて、子供達の成長を再発見することができました。さて来年はどこへ行きますでしょうか。

ボーリング大会に参加して

村井誠

久しぶりに皆さんに出会えてすごよかったです。ボーリングの

投げ方など少しは上達してきたものの途中で息切れをしてしまう時もありました。思えば10年近く前に今関さんの誘いで初めて参加しました。あの頃は本当に投げるのがやっとならした。ゲームの後、みんなで食事をしたりしているような家庭の近況などを聞いて参考になりました。



コロナウィルスの蔓延でボーリング大会が中止になったことがありました。もうやらないかなあと思っていました。ボーリング大会が再開してからはコロナ以前の私とは違う気持ちで取り組んでいます。前の私はただボーリング

をしよという気持ちで参加をしていきましたが、コロナ以降は自分の身体を自由自在に動かしているような感覚でゲームに臨めるようになりまし。そうしたら失敗がかなり少なくなり、何となく上達してきた気がします。しようという気持ちに強く縛られてしまうというからでしょう。

私はコロナ以前の2019年ごろから美術館巡りや古写真真展示、歴史博物館などで作品を鑑賞するのが趣味で東京の方にいたり、横浜に行ったりしていました。作品から多くの刺激を受けているうちに人が行動する時は、集中力や気合よりも自由自在精神がないと上達は難しいということがわかったのです。

誰かに勝とうとかいうのではなく、自分が自由意志を持って動かないとむしろ悪い方向にいつてしまふということがわかりました。何も意識せずに自由自在な気持ちでやれば良いという気持ちになりました。



ミヅクラブ鉄道部夏企画 復旧した只見線 磐越西線と 新津資料館の旅

8月26日から27日にかけて、青春18きっぷを利用して鉄道の旅に市岡武さんをはじめ、ミヅクラブのメンバー数人で出掛けてきました。

今回乗りました只見線は、2011年の新潟・福島豪雨災害で10年以上不通の区間が続きましたが、2022年10月1日に復旧、再開しました。また一年を通して季節との組み合わせが美しい路線で名高く、2008年には、『日本経済新聞』土曜朝刊別刷り(NIKKEI PLUS) 何でもランキング「紅葉の美しい鉄道路線ベストテン」の第1位に、2003年には「雪景色のきれいなローカル線ベストテン」の第3位にそれぞれ選ばれており、また近年では旅行雑誌の『旅と鉄道』で2016年5月号の「好きなJRローカル線ランキング(東日本編)」で1位に選ばれたりしています。このほか第一只見川橋梁が、日本の有名な橋梁ベスト3に常にランクインしています。



です。是非乗ってみたいかったです。ただ本音を打ち明けますと、実は当日まで行きたくない気持ちもありました。なぜなら宿泊先のホテルは福島県喜多方市で初めて足を運ぶ地で、喜多方駅とホテルの距離や周辺に店などがあるか気掛かりでしたし(当初は会津若松市に宿泊予定だった)、列車の運転本数や接続などの関係で日程が過密気味にならないかと(特に2日目の起床時間が早かった)自身は感じたからです。正直二つの気持ちと交錯みたいな複雑な想いとなっていました。

そしていざ当日を迎え、1日目は船橋駅で皆さんと待ち合わせて

総武線快速で東京駅に向かい、高崎線、上越線、只見線などを利用して喜多方駅へ行きました。途中の深谷駅では有名な東京駅に似てるレンガ駅舎を目にしました。深谷川駅では本物の蒸気機関車も見ました。土合駅は地下深くにあり、日本一のモグラ駅として名高く、登山客などで混み合っています。昼飯は東京駅で弁当などを買いました。列車内で食べました。

只見線に乗り、車内は案内の方が区間ごとに乗務して、車窓や沿線の魅力などを放送案内や特産品の車内販売をしてきました。少しでも利用者を増やし、路線や列車を活性化させようとの意気込みを強く感じました。

自身は、只見川や鉄橋、田園、会津盆地など、絶景や幾つかの駅を満喫しました。また乗車中、外は突然の大雨に見舞われることもあり、特に支障はありませんでしたが、自然の脅威を痛感させられました。

夕飯は、ホテル近くの喜多方ラーメン来夢で名物な喜多方ラーメンなどを皆さんで食べました。麺がもちもちして、汁があっさりして食べやすく、美味しかったです。



2日目は、前日の夕飯後に近くのコンビニでパンやサンドイッチを購入し、それをホテルで食事して、喜多方駅から磐越西線で新津駅に向かい、新津鉄道資料館へ行きました。

新津駅でも、本物の蒸気機関車を見ました。それとは別で、新津駅と新津鉄道資料館の移動でハブニングがありました。どういう事かと言いますと、距離が長い事が新津駅に到着して、いろいろ調べてわかりました。自身は、帰るのも皆さんに提案しましたが、市岡武さんが「折角ここまで来たのだから、タクシーを利用して行きましょう」と言い、行きました。

新津鉄道資料館では、以前、走っていました鉄道車両などが保存展示されていたり、鉄道に関して詳しい情報などが公開されていたりしていました。新津（新潟市）はかつて、

鉄道のまちと言われたそうです。またこの日、保存展示の一つ、200系新幹線先頭車両で運転席が特別に公開され、折角の機会ですのを見に行きました。運転席の位置が高くて驚きました。



新津駅に戻りこの日の昼飯もコンビニや売店で弁当やパンを買いました。駅近くの施設で食事しました。また、新潟駅近くの万代シティバスセンターで名物の一つ、レトルト式となつていますバスセンターのカレーを土産で買いました。テレビ番組で取り上げられたこともあるようです。その後は長岡駅を経由して同ルートで戻り、東京駅で解散しました。

途中の湯檜曾駅では、螺旋状に敷設のループ線と呼ばれる構造となっており、構造の関係上、到着前に高い所から駅が見えました。あつという間の2日間でした。

そして今後は是非、このクラブの皆さんで秋田市や神戸市に足を運びたいですし、愛知県を走る名鉄こと、名古屋鉄道にも是非1日中、乗りに行きたいと思っています。最後に市岡武さん、ありがとうございました。



世界自閉症啓発デー inちば



毎年4月2日は国連が定めたWorld Autism Awareness Day (WAAD) 世界自閉症啓発デーです。

千葉県自閉症協会では毎年、千葉県発達障害者支援センターCAS、千葉市発達障害者支援センターとともに「世界自閉症啓発デーinちば実行委員会」を組織してイベントを開催しています。本年は4月2日～8日に千葉市生涯学習センターで自閉症の人たちの絵画、作品などを展示するとともに

に、千葉ポートタワーをブルーライトアップしました。また、啓発ポスターを千葉都市モノレールなどに掲示し、各地区で懸垂幕掲示やチラシ配布を行っています。

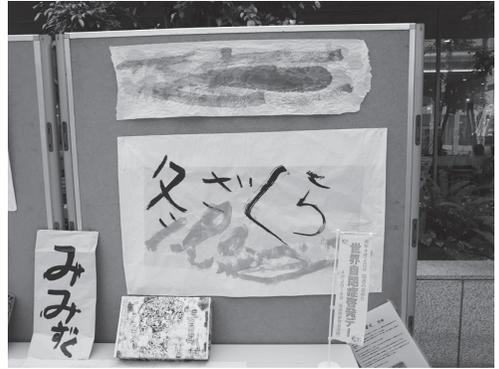
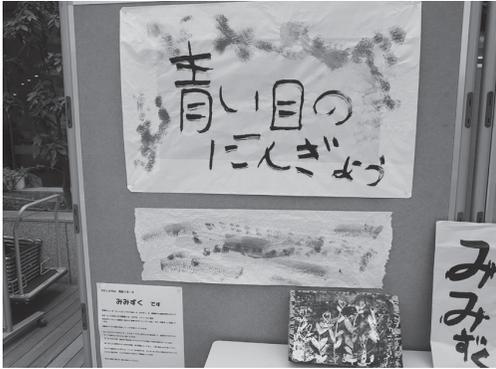


新型コロナウイルスの感染拡大予防のため、三密を避けて駅前でのチラシの配布や会場での生のコンサート、演劇等は今年も実施できませんでしたが、新しい取り組みとして、YouTubeに「世界自閉症啓発デーinちば」のチャンネルを作成しキャラバン隊やミニコンサートなどを配信するとともに、千葉テレビで啓発デーのCMも放映しました。

千葉市生涯学習センターに来館された方々が足を止めて、パネルや自閉症児者の絵画、作品等を見てくださいました。少しでも多くの方に、自閉症について知っていただくこと、理解していただくことが、だれもが幸せに暮らすこと

ができる社会の実現につながるものと期待します。





11月には元の状態の6割ぐらいまで戻りました。

この頃から、長男をGHに入所させることを具体的に検討し始めました。当初、長男が通っている生活介護事業所の親たちと立ち上げることを考えましたが、人と資金の面で難しい事が分かり、相談支援専門員、GH等支援ワーカーの方に相談し、現在のGHに入所することができました。GHは制度的に3種類（介護サービス包括型、外部サービス利用型、日中サービス支援型）ありますが、長男は朝起きてから夜寝るまでの日常の基本生活が一人ではできないことが多く、毎日、生活介護事業所に通えないこと、夜間支援員が定期的な見回りと、緊急時の対応をして頂けることから日中サービス支援型のGHに入所しました。

わすと共倒れになる可能性があるので、GH、生活介護事業所、相談支援専門員と情報交換をしながら通う時期を決め、今年の2月から週3回通える様になりました。又、生活環境の変化に徐々に慣らすため、2週間に1回、1泊2日で帰宅させていますが、GHに戻るとに渋る事が有り、その都度私と家内が「家に居たら我々がいなくなったら一人になって困るが、GHはいつでも助けてくれる人がいるので安心な場所だ」と言って送っていました。そして8ヶ月経った今、渋ることもほとんど無くなりスムーズにGHに帰れる様になりました。

当初、GHの支援内容が契約時の説明と合わない部分がありましたが、長男の送迎時に都度、管理者、サービス管理責任者と話し、改善して頂きました。又、先日、GH、生活介護事業所、保護者との三者面談の場を相談支援専門員が設けて下さりましたが、それぞれの場所での長男の様子を伺い知ることが出来、安心すると同時に長男に寄り添った支援をして頂いており、大変有難く感謝しております。

「地域で暮らす」ということ
我孫子市自閉症協会 鈴木 祥子

廉太郎は、今夜も家の窓から外を眺めている。兄が大学から、そして父が職場から帰ってくるのを待っているのだ。待っている間、通りがかりの近所の人に向かって「や！」と声をかけ、手の甲を相手に向けて振りながら「ば！」と言う。彼は「おーい、バイバイ！」と言っているのだが、それを知らない人からは奇妙な姿に見えるだろう。しかし、近所の人は手を振り返したり、「廉ちゃん！」と返事をしたりしてくれる。

廉太郎、19歳。我が家の次男坊。重度の知的障害を伴う自閉症である。今春、特別支援学校高等部を卒業し、生活介護事業所に入所した。野菜作りや受注作業に取り組み、毎日元気に通っている。

母である私はこの春まで、公務員として32年間働いていた。廉太郎を1歳から預けた地元の市立保育園は、彼に加配の保育士を付けて、他の子と一緒に育ててくれた。廉太郎に障害が見つかった時、私は保育園の保護者会で公表させてもらった。

園児からは、「廉ちゃんはどうしてしゃべれないの?」「病気の?」とよく聞かれた。「廉太郎には、お話やいろんなことがうまくできない『障害』があるからなの。でもゆっくり話したり、一緒に遊んだりしてくれたら、廉太郎は嬉しいと思うから、よろしくお願いします。」と話す、多くの子どもなりに理解してくれた。

親御さんたちも、ごく自然に廉太郎を受け入れてくれていた。自閉症の記事を切り取って渡して、障害に関心を持ってもらえたことを知り、公表した意味があったと感じた。

小学校の就学にあたっては、特別支援学校を選択することも出来た。しかし私達夫婦は、廉太郎には兄と共に地域の中で育ててほしいと願っていたので、「兄と同じ地元の小学校に通わせたい」と校長先生に手紙を書いた。すると校長先生から「廉太郎君を待っていますよ。」と電話があった。温かい言葉に胸がいっぱいになり、電話口で泣きながらお礼を言ったことは生涯忘れられない。

入学後は特別支援学級に在籍したが、同学年の普通学級の保護者会には必ず出向き、挨拶をさせてもらった。

小学校時代は、市の学童保育にもお世話になった。そこでは、長男は周囲から「重度の知的障害児の兄」と認識されながら過ごした。急に奇声を発したり、飛び跳ねたり、大泣きしたりするのは、廉太郎の障害の特徴であるのだが、友達から「うるさいよ」「あっちへ行つて」と言われている姿を見て、兄は「つらい。もう嫌だ。」と私に訴えることもあった。

しかし、市の心理相談員が何度も相談に乗ってくれた。学童の先生は、廉太郎が意思を伝えやすいように、写真や絵カードを手作りしてくれた。また、私と夫の両親が、子ども達のお迎えや病気の時の看護などの支援をしてくれたおかげで、息子たちは元気に育ち、私も仕事を続けることができた。

小学校で多くの地元の人に廉太郎を知ってもらえたと実感できたこともあり、思春期を迎えるにあたって、中学は専門的な教育を実施している特別支援学校に進んだ。支援学校では、高等部卒業ま

で手厚い教育を受けた。

今、苦勞しているのが、廉太郎が病氣や怪我をした時の病院選びである。障害の特性を理解し対応できる医院・病院はまだ少ない。地域の障害者の家族は、お互いに情報を教えあつて、障害者を気持ちよく受け入れてくれる病院を探している。

情報を得て出向いた眼科は、自宅から車で一時間ほどの場所にあった。地域の一般的な眼科だが、県外からの障害者も多く来院しているのには驚いた。

廉太郎は、同じことを数回繰り返す、障害特有の「こだわり」を持つている。これは病氣でいえば症状のようなもので、本人の意思で直せるものではない。眼科医に機械で目を診てもらったあと、彼なりのジェスチャーで「もう一回診て。」とやっていたところ、そばにいた看護師が気づき、医師に伝えてくれた。医師は「じゃあ、もう一回診るよ。」と言つて繰り返し、三回目で本人が納得して終えた。

廉太郎のこだわりに対し、医師から迷惑そうな顔をされたり、「早く診察室の外へ出して！」と看護

師から叱責されたりすることはこれまで幾度となくあった。こだわりへの対処方法を説明する雰囲気すら持てないことが多い。しかし、この眼科の対応は、「また迷惑をかけるのでは」と毎日心配しながら過ごす、家族の心をも癒してくれた。障害者に寄り添う医療を、どの地域でも受けられるようになることを切に望む。

廉太郎は、言葉や文字では自分の気持ちを伝えられないので、「行動」で思いを表現する。家族への愛情もそうだ。全員が帰宅すると、彼は「ばー」と言つて、手をつないで輪になることを要求する。つないだまま、歌に合わせて全員一緒にジャンプをさせる。何度もせがみ、家族が繰り返すたびに満面の笑みを浮かべる。彼が「おかえり、待っていたよ。みんな揃ったね。」と言っているのが表情から分かる。彼の笑顔は天下第一品であり、家族の「明日へのパワー」となっている。

長男は、自分の帰宅を待つ弟を「ただいま」と言いながら毎日抱きしめる。今年、地元の成人式に出席した際、同級生に「廉ちゃん元氣？」と聞かれ、嬉しかったと

言っていた。

我が家を支えてきたものは、意思疎通が難しい廉太郎に対して偏見を持たず、許して受け入れてくれた地域の人々の存在だ。

心配は尽きない。それでも発語のない廉太郎が訴えるサインに気づき、足を止めて理解しようとする人が一人でも増えることを願う、今日も廉太郎と街に出ようと思う。

※本記事は千葉県の2019年度心の輪を広げる体験作文入賞作品です。

(<https://www.pref.chiba.lg.jp/shoufuku/event/kokoronowa/rokketta/sakubun-ippan.html>)より転載したものです。



